

因도 「술」이 아니었던가 믿어진다. 그도 그럴것이 그當時 日帝의 斷末魔的 造作으로 朝鮮語學會事件이니 무어니하여 愛國志士, 學者, 青年들을 數없이 監獄으로 墮어넣을때 又玄兄만 平安히 書齋에서 研究할 수는 없었을 것이다. 鬱憤과 孤獨을 잊어버리려고 取한 詩이 亦是 술이 아니었던가 그를 빼앗아간 病 「肝硬變症」은 이제나 그때나 한번 걸리면 完治시키기 어려운 痼疾의 病이다. 그 病은 勿論 「술」과 至大한 關係가 있다. 그때의 主治醫었던 나는 한 五年만이라도 더 살아주었으면 하던 所望을 이루지 못하고 病난지 三年만에 그는 永永 不歸의 客이 되고야 말았다. 배에 물이 잔뜩 고여 呼吸困難과 步行까지 못하던 그가 病的 差度가 있어 腹水가 完全히 빠지고 가벼운 몸이 되었을때 절대 安靜하라는 나의 忠告를 물리치고 그가 寓居하던 博物館에서 나의 집까지 걸어나와 나를 놀라게 하였다. 그의 心情은 病이 나아져서 오랫동안 누어만 있던 病席에서 잠시나마 解放되어 바깥 空氣도 힘껏 마실겸 나에게 情誠어린 마음을 풀어 왔을 것이요, 나는 그가 그만큼 順조롭게 病이 나아가는 것을 고맙게 여겨 서로 께안고 눈물을 흘리던 生覺이 어제와 같다.

그때 又玄兄은

『여보 朴兄! 내 마음이 大端히 기쁘니 술한잔 안추겠오?』 이 얼마나 哀切한 心情인가? 내 그에게 半盞 술을 주고 그 代身 그의 몫(分)까지 합쳐서 한瓶의 술을 내가 혼자 마시었다.

어느때가 그가 病室에서 步行이나 겨우 許容받았을때 只今 우리나라의 太極旗를 그리면서 네 모퉁이에 있는 八卦는 易學에서 나온것인데 理致는 좋은나 너무 어려워 位置를 記憶하기가 힘들니 美學的으로 보아도 靑과 赤이 서로 엉크러져 있는 圓 하나만으로도 좋다고 말하였다.

病나기 전 健康하였던 그가 坐席에서 自己親舊한 사람이 江가에 近시질을 가서 커다란 잉어 한마리를 잡아가지고 좋아하는 同行들에게 近處村家에 가서 白紙와 먹(墨)과 베투(硯)를 빌려오라고 하더니 白紙 위에 잡아온 「잉어」의 拓本을 만들고 잉어는 江물로 다시 살려보내고 탁본한 白紙를 배운탕속에 집어넣어 끓여먹는 것을 보고 처음에는 무척 哀惜하게 여겼지만 나중에 그 親舊의 멋드러진 風流에 感激했다는 말을 들

었다. 이제 又玄兄이 간지 滿二十年 그를 爲해 同志들이 세운 碑石은 아직도 松都郊外 水鏡洞에 있으면만 只今은 오고가지 못하는 以北아닌 以前의 그를 追慕하더니 이제는 그 누가 그를 찾아 술을 부어 주려나? (一九六四年 初夏)

高裕燮氏の思い出

中 吉 功

今年六月二十六日は、韓國美術史學界の草分けである高裕燮氏の歿後二十回忌の記念日にあたる。かねて黃壽永氏から追憶記の依頼があったので、亡き高裕燮氏の生前の思い出の一端をつづって故學契の靈を弔いたいと思う。

高氏と私との知り合いの始まりは、一九二八年の四月のことであった。私がソール大学の前身である京城帝國大學法文學部美術史研究室にはじめて職を奉じたとき、高氏は美術專攻の二年生になったばかりであった。主任教授の上野直昭先生 當時研究室には野先生一人であったに紹介されたとき、実に好感のもてる人と直観したが、案にたがわず交際するうちに段々と高氏の奥ゆかしい人柄に魅せられるようになった。お互いに胸襟をひらいて話す間柄となり、朝鮮人とか、日本人とか、そんな分けへだてはちっともおこらず、いつしか兄弟のような親しみが湧いてきた。當時特に印象にのこるのは、ドイツ語の原書の美学演習の時間に先生一人、学生一人 勿論高氏で、なんとという勿体ないことかということであった。上野先生と高氏がむかいあって高氏が音読しては邦訳していた学生服の姿が昨日のように目前に浮んでくるものなっかしい。高氏はいつも上野先生の堪能なドイツ語のすばらしいさを私に話していたのを覚えている。やかつて三年に進

むころ、上野先生の指導のもとに卒業論文にとりかかってフィドラーの美学思想についての論文となったが、私はそれをみせてもらい実に達筆な原稿に驚き、筋の通った論考に感心したのを忘れ得ない。一九三〇年三月、開学最初的美學美術史専攻の卒業生となったが、当時としては日本でも美学専攻では就職もおぼつかなく食つてゆけないのが相場であった朝鮮ではなおさらのこと、高氏はこれからどうするのであろうかと私はそれとなく気にかかったが、高氏は深く心に期するところがあつたとみえ、あえて食えないのは覚悟の上で美学を専攻したものと想像される。卒業前には東京帝大文学部の美学科に再度入学を希望していると上野先生から聞いたが、それは家庭の事情で取り止めとなり、前任の渡辺一助手が軍隊に入隊したのでちょうど空席となった美学研究室の助手に上野先生のきもいりで都合よく任命されて、私はほっとしたのも記憶に残っている。それ以後一九三八年三月まで、満三ヶ年助手として在任され、私とともに思い出深い研究室生活を送つたのである。この三ヶ年間高氏の学問的興味は美学から具体的な美術史の研究にうつつていったように思う。それは高氏の大学二年の二学期も終り頃、田中豊蔵先生が欧州から帰朝されて東洋美術史の特殊講義に強い影響をうけたためではないかと想像される。それに考古学の藤田亮策先生も週に一二回研究室に顔を出されて、朝鮮の古代文化の数々の話をされたのもあずかつて力となつたのではないか。おそらく高氏の心の底に自國の古美術に特別の反省心を呼びおこし、やみがたき研究意識をかきたせたのではないかと推測される。

その頃私も朝鮮の歴史と文化に少しづつ興味が湧いてきたときで、たまに中樞院の大原利武氏の『高句麗式』と思はれる義山里「石塔」という論文を読み、読後これを高氏に示したことがあつた。「高さんあなたは一つ朝鮮の石塔について研究されてはどうですか。これまでの研究は関野博士の石塔論ぐらいのもので、本格的な研究はどうしても朝鮮の人でなければ真に地についたものではないのでしょうか」と話したことがあつた。その後高氏は新羅石塔の研究に心血をそがれるようになったのは周知の通りであるが、ある日のこと「中古君がいつてくれたのが僕の石塔研究のそも

その動機となつた」と一度口に出して話されたことがある。もとより上野、田中、藤田各先生の信頼も厚く、ことに上野、田中両先生は愛弟子として特別に高氏に愛情をそがれていたように思われる。これは当時の研究室の雰囲気を知る私の断言してはばからないところである。

がんうい美術史の研究は現在も同様であるが、便宜上写真を必要とするが、幸いに京城大学には写真室があつて、主任教授である上野先生の直接監督のもとにあつたので、高氏の石塔研究にはなにより都合この上もない仕合せとなつた。当時写真室には円城寺勲という向う意気の強い人がいて、円満性を欠く性格であつたが、根は単純で異常なほど、高氏の人柄にこれこみ高氏の石塔研究に全面的に協力を惜しまなかつたのも幸ひした。これは高氏にとっては潜竜雨を得て天に昇るにもひとしく、またとない仕合せであつたと思う。このようにして高氏の研究は円城寺氏の技術的協力によつてますます本格的に推進していった。一九三四年三月、その中間的成果を「朝鮮の堪写真展覧観」として大学の中講義室を会場に展示したところ意外に評判がよかつたことを忘れることができない。これは日頃高氏のたゆまざる研究が実を結んだものとして忘れられない業績である。このように高氏の研究は一步一步とその地歩をききずき、やがて関野、藤島両博士の建築家のそれとは立場を異にする文献的芸術史的独自研究が斯界に認められたのである。それは「仏國寺の舍利塔」、「朝鮮の埴塔について」、

「所謂開國寺塔について」等の諸論文によつて知ることができよう。つぎに忘れることのできないものに、助手在任中に着手された朝鮮画人伝の根本史新の蒐集がある。当時奎章閣圖書について数百冊におあぶ詩文集のうちから、李朝絵画に関する記録を一言半句といえどももらすことなき拔華筆録されたのであるが、そのたゆみない根気はとうてい常人のできない連続で、夏の暑い暑いさなかでも寒い真冬でも、漢文に堪能な高氏はス。ピーディに読破し、これを拔華していった、この筆録は一九三八年高氏の開城府立博物館長に就任してからも続けられ、その後週一回梨花女子専門学校に美学美術史の講義に上京するたびに、私のもとに立寄り私の名儀で大学図書館から李朝の文集を借り出してはそれを開城に持帰つ

て拔華し、また次の週に返本するという風であった、それが三、四年続いたかと記憶する。おそらくその時の拔華原稿は数尺にも達しているのではないかと思われる。もし高氏が長命であつたら、権域書画徴の名著につづき朝鮮画人伝集成とも称せられるものが数巻刊行できたかも知れないといふ思つてもか之すが之すも残念である。高氏の研究熱心さに対し早くも田中先生は期待するところ大きく、朝鮮画についての論文執筆を慫慂されたのを覚えてゐる。それは先生の推挽によって美術専門誌「画説」に掲載された「憎鉄関と釈中庵」であり、「售狗沽酒(高青)である。つづいて「安堅」、「安貴生」、「尹斗緒」等の画人の伝記が富山房の国史辞典に載つた。おそらく「養怡亭と香園」も田中先生から依頼された論文ではないかと思ふ。

これよりさき開城府立博物館の初代館長の金氏が辞任してしばらく館長の席は空席のままになっていたが、たまたま後任館長には是非共朝鮮人館長でなければならぬという開城府の要望があつて、藤田先生も一枚相談にあずかつて高氏を推薦したいきさつがあつた。いよいよ高氏も館長就任の腹をきめかかつたとき、田中先生は大いにこれを「喜ばれ、高君鶏頭となるも牛尾となるなかれ、という言葉があるように是非開城へ行きたまえ」といわれたのが印象に残っている。そして田中先生は次の日曜日わざわざ愛弟子のために開城まで出向かれて下検分して帰られたのを覚えてゐる。ちょうど上野先生はドイツに交換教授として渡欧中であつたと思うが、上野、田中両先生の高氏へ対する情愛ははたでみるのも深くうるはしいものが感じられた。

高氏は一九四三年六月東京で開かれた文教省主催の日本諸学研究大会に「朝鮮塔婆の様式変遷」と題して研究発表を行うために上京の途、その当時職を大阪の地に変えていた私に電報をもつて知らせがあつたので、すぐ大阪駅に出迎えに行つたときの実感は今だに忘れられないものである。十数年住みなれた朝鮮から帰国して始めて朝鮮時代の友人知己を迎えるのであるから、私としては「友遠より来たる亦楽しからずや」の論豆の句が胸にわき、喜びとなつたかさで一ばいであつた。早速私の寓居に伴ない

久潤の辞をかわし、一泊休養してきらつた。その時高氏の土産を一言いい添えて高氏を偲ぶ語り原にした。それは夫人の真心こもつた朝鮮のお菓子の持参であつた。私は妻とともに感激した。たにしる太平洋戦争耐わなときで、物資はきわめて窮屈で、砂糖の配給は減多にない状態であつたから、私たち二人は蟻の砂糖に食ひいるように舌鼓をうって頂戴した。その日は幸いにも蘇と野菜と母の意外の配給があつた日で、遠路の客、高氏に對しては思わぬ歓迎の宴となつたことは、当時の状況としては最上級の夕餉で、今でもその日のことを妻と語ることがある。さてお土産に貰つた朝鮮のお菓子は白米の粉と白砂糖をまぜたものをふかして焼いたもので、一見して日本の「落雁」に似たものであつた。「落雁」は茶人の最も嗜好する菓子であるが、私の想像するところでは「落雁」はあるいはその源流を朝鮮とするきのではないであらうか。というのは朝鮮では誕生日とか、結婚式とか、あるいは巫覡の祭壇にはかならずこの日本という「落雁」のような色をつけた飾菓子(ひら)が供される。これは相当古い伝統で高麗から李朝の初め頃に溯るものと想像され、その製法が室町時代にわが国に輸入されたのではないかと考えられるからである。

高氏はこのお菓子を私の宅に下されるとともに、東京にいられる恩師上野、田中両先生のお宅へもお土産として持参された。のち上野先生から「高君がわざわざ朝鮮から米の粉の甘いお菓子を持って来て呉れた」と私に喜んで話されたことを覚えてゐる。真心のこもつた夫人の手によつて作られたお菓子は、物資極度に涸渇してゐた当時としては思わぬ喜びであつた。

話がまた朝鮮にもどるが、私は高氏と二人で鉄原の到彼岸寺を訪ね、本尊の背面にある咸通六年の造像銘を拓本にとりに行つたことがある、その時の拓期は今も私の書斎の壁にかかつてゐる。また一九三一年の春開城の史蹟を探り、南大門前の開城旅館に泊つたが、純朝鮮旅館に泊つたのは私には始めてであつた。習日高麗太祖頭陵に詣り青々とした芝生、静まりかへた墳丘、向つて左側に建つ丁字閣など忘れがたい深い印象がのこつてゐる。それより靈通寺址をたずね、そこに立つ三基の石塔を調査し、昼食を

とった。つづいて恭愍王陵にたどりつき、陵墓の莊藏にうたれたのも忘れられない。しばらくして前方の畑の中から私は梵字銘のある垂瓦の破片と迦陵頻迦の模様のある軒丸瓦を採集したが、高氏は遂に梵字銘のある瓦片は拾うことができなかったので、いかにも残念そうであった。それから二三年たつて高氏が開城博物館長に就任されてから私はそれらの瓦を高氏へ寄贈することにした。採集当時の高氏のいかにも残念そうな顔色を思い出して何か役に立てばと思つて贈呈したものであるが、高氏はこれに對し博物館の公印を捺した感謝状を送付したのには全く面くらつた。しかも博物館のがラスケースの中に寄贈者である私の名前を記入した題箋まで付してあったのを後で知り、高氏が私の厚意をあくまで公的なものとして受理された公正無私な態度に感激を新たにしたが、ここにも高氏の人格の高潔さがうかがわれる。

高氏と私の交友の数々は限りがないが、最後に高氏を短命に終らせた遠因と思われるものを語つて拙文をこの辺で終りたいと思ふ。それは高氏の大学助手在任中のことである。フランス教会の近くに下宿していた写真技師の今関光天氏の寓居に、われわれ研究室のもの三人、高氏、円城寺氏、中吉が一夕御墨走に招かれた。冬の寒い道はカンカンと靴の音のする晩であった。くわしいことは忘れたが、家の老婆が三味線をひいたりして相当賑わつたことだけは覚えてゐる。高氏は日本酒一弁ぐらひは飲んだに相違なく、言葉もシドロモドロとなり呂律がまわらなくなるほどの酔いかたであつた。円城寺氏と高氏とはお互いに「オイ！ コラッ！ 貴様、馬鹿野郎！」という最も親しいあまりの乱暴なやりとりとなり、日本語としては最低の口調の連続となつた。私は高氏がこんなに酔つたのは始めてみる経験で、いも思えば廿代の青年としてはこれ位の元気があつても不思議ではないが、なにしろ意気さかんな円城寺氏のことであるから、ついつられて高氏も野卑な日本語を連発し、口先から出る乱脈さは驚くに堪えないものがあった。しかし少しも邪気のないものであつた。十二時も過ぎる頃で痛飲したように思ふ。すでに終電車にも間にあわなかつたのを覚えてゐる。円城寺氏は要領よく便所に行ったまま姿を消してしまつた。正直な高氏は飲

み相手の円城寺氏が姿を消したので、その後を追跡して黄金町三丁目の電車通りに出、「円城寺氏はどこへ行った？」、「コラ円城寺！ 円城寺！」と深夜の街を蓮呼して千鳥足で進むのである。何度叫んでも姿のみられないのは当り前で、円城寺氏は大和町に住んでいたもので、高氏の方向とは正反対の方向にすでに姿を消しているのである。それとも知らず高氏は相も変らず呼び続けるので、私は高氏の身が心配となり後を追つて手をとり介添役を求めたが、気分だけ元氣な高氏は私の腕を振り切つて「心配するなよ、これしきの酒に参るものか」と大言壮語しつゝシドロモドロの足並をしてとうとう崇三洞の自宅へ帰つてゆかれたのであつた。私は高氏が日頃謹直真摯な人柄だけに、その夜の酒豪振りに驚いてしまつた。高氏は日本語でいへば実に口の綺麗な人であつた。食事にいやしくなかつた人である。しばしば私に向つて「中吉君は大食家だ。僕は「小食家だ」といつていたのを覚えてゐる。そういう人であるからその夜の酒の酔のい振りから考えると、あまり食事を口にせず空腹のまま、思うにまかせてガブガブお酒を飲んだように思われる。それ以後亡くなるまでの高氏の酒の飲み方はよくは知らないが、高氏を短命にしたのは案外このようなところに身体を害した遠因があるのではないかと想像される。ありし日の高氏を思うにつけ、私はその点が惜しまれてならないのである。酒は百薬の長という位であるから、きつと注意をして酒をたしなめられたら、あるいは長寿を保つていふれたかも知れない。かえすがえすも残念でならない。「いままも高氏が存命であれば」ということは、ただ私ばかりでなく韓国知識人のあべてが思う痛念の言葉ではなからうか。私と高氏との十数年間の友情は実に民族の感情を超えた深いものであつた。私の生涯において忘れ得ざる最も畏敬する学契であり真の人間的人間としてあがめてゐる。いま二十回忌を迎えるにあたり、感慨特に深いものがある。

とりとめのない思い出の数々を綴り、亡き高氏の人格を傷けたやも知れず、失礼の辭は寛恕して貰うともい、御遺族の御多幸を祈つてやまないものである。

——一九六四年、五、十五——